

発表タイトル：

感性と悟性の共通の根——ハイデガー『カントと形而上学の問題』とカント『判断力批判』の交差点

長坂 真澄（群馬県立女子大学）

発表要旨：

ハイデガーの『カントと形而上学の問題』（以下「カント書」と略記）は、カント哲学を超越論的構想力および超越論的図式論を中心に据えて捉え直す、画期的なものであった。しかし、感性と悟性の共通の根を超越論的構想力に求め、その超越論的構想力に由来する悟性を理性と同一視することを主張するカント書の読解は、カントにおける理性の統一的役割を構想力に移し替えてしまう強引さを持っており、その点でカント哲学の建築学に根本的に反する危険を孕んでいた。そのことは、この書が超越論的理想を超越論的構想力の産物として捉えるときに、より鮮明となる。

本発表の目的は、カント書が示した、超越論的構想力を悟性と感性の隠された共通の根とする読解を、『純粹理性批判』とではなく、むしろ『判断力批判』と対照させて再考察することによって、この解釈が持ちうる新たな可能性を探究することにある。

知られているように、カントの『純粹理性批判』は、ヒュームの経験論によって、客観的必然性を持たない単なる習慣的原理であるとされた因果律を、ア・プリオリな原理として救うことを一つの動機として書かれた。そのためにカントは、ア・プリオリな総合判断が可能であることを主張し、このような判断が可能となる仕組みを提示した。さて、このための説明装置として重要な役割を果たしたのが、超越論的図式論であった。というのも、カントにおいて、認識は直観と思考の結合であり、ア・プリオリな総合判断は、まずは純粹直観と純粹思考の結合として捉えることができるからである。図式は概念と直観の媒介者であり、超越論的図式論のみが、純粹直観と純粹悟性概念との結合がいかんして可能であるかを説明することができる。

カント書の斬新さは、この超越論的図式論を介して可能となるア・プリオリな総合判断を、存在論的認識として提示したことにあつた。その読解を提示すべく、ハイデガーは、知られているように、総合の働きを構想力に基ける『純粹理性批判』第一版のカテゴリーの超越論的演繹に依拠し、総合の働きを悟性に帰す第二版は第一版に対する後退であるとの説を提示した。

さて、この説は後年のハイデガーのカント読解においては大きく修正をこうむることになるとはいえ、ハイデガーがカント書において、理性の働きを超越論的構想力に帰す強引な読解を敢えて推し進めたことの意義は、『ニーチェ』においてはじめて明らかになるように思われる。なぜなら、ここでこそハイデガーは、理性は構想力そのものであると宣言するからである。

この『ニーチェ』においてハイデガーが言及しているのが、カント『判断力批判』にはほかならない。たとえここでのハイデガーの『判断力批判』言及がかなり限定的なものであるとしても、ハイデガーがニーチェの語る「図式化」や「カテゴリー」という語彙に着目するとき、彼の念頭にあるのは、明らかにカントの図式やカテゴリーである。ただし、ハイデガーの議論の前提になっているのが、あくまでも『純粹理性批判』における、概念を前提とする規定的判断の図式であるのに対して、我々はむしろ、ここでのハイデガーの議論を、『判断力批判』が語る、反省的判断における概念なき図式化にこそ、重ね合わせることを試みる。なぜなら、ハイデガーがニーチェの芸術をめぐる格言を考察するとき、そこではもはや認識は問題となっておらず、美の経験こそが問題となっているからである。

この『判断力批判』こそ、『純粹理性批判』が明言していなかった、感性和悟性の共通の根について、一つの可能な答えを与えてくれるように思われる書物である。なぜなら、美的＝直感的判断が問題となるとき、認識の場合におけるような感性和悟性の分断はもはや消滅するからである。美的＝直感的判断は判断である以上、悟性の働きであるが、同時に感性の働きでもある。ここでこそ、感性和悟性の共通の根として構想力を語るハイデガーの説が、説得力のあるものとなるように思われる。

さらに、『判断力批判』においては、理性理念の対としての美的＝直感的理念、すなわち、超越論的理想の対であるような美的＝直感的理想が語られる。この理想は、認識の対象ではそもそもなく、それが真であるか仮象であるかということは、問題とならない。この議論において初めて、超越論的理想を超越論的構想力の産物であるとするハイデガーの説が、意味をもちうるものとなる解釈の道が開けるのである。

このような解釈に基づくならば、ハイデガーが目指すのは、もはや一般的概念によって説明可能な存在についての「学」（存在論）ではないことになる。語られるべきはおそらく、概念化されえない存在の運動そのものとの、カテゴリーなき出会いなのである。